
タイムマシン

milktea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タイムマシン

【Nコード】

N6315D

【作者名】

milktea

【あらすじ】

人間にとって夢のまた夢の機械である「タイムマシン」。これさえあればどんなことでもやり直したりすることができるかもしれない。主人公は出会った女性と本当の恋に落ちる。しかし、そこに待ち受けていたのはあまりにも辛い結末だった…。そんな甘く切ないストーリー。

第一章「冬の訪れ」

どんよりとしたくもった空。

昼の十二時を過ぎたばかりだというのに空はまるで夕方の六時をまわったような感じ。

なんとも鬱な気分になさてくれる。

僕はいまちょうど取引先の仕事の帰り道を歩いているところだ。

僕の勤めている会社は薬品会社である。通っていた大学が理系の大学であつたため、関連のある会社にとりあえず勤めることにした。当時、僕自身とくにこの会社に入りたいという気持ちはなかったのだが、僕が四年時に所属していた研究室の担当教授の推薦ということなので仕方なく入社したわけ。

入社してしばらくたつが、どうもこの会社は規則に対してあまり厳しくないようだ。

会社での実績があればとくになにかと言われることはないらしい。このことは以前に上司である坂上さんという人から教えてもらった。

坂上さんとは、僕の教育係りとして入社したての研修期間中にお世話になった上司である。

年は五十代であるとしか聞いていない。身長はあまり高くはなく僕と同じくらい。ちなみに僕の身長は167センチと小柄である。

この人の趣味は将棋で、僕はよく会社の休み時間とかにつき合われていた。そのおかげで僕は将棋の腕が少しずつあがっていった。しまった。

研修期間が終了に近づいたときには坂上さんを倒すまでの実力になつてしまい、もうしわけない気持ちになつてしまったことを覚えている。

研修期間を終えて、一人前になつたいまでは坂上さんとの交流はあまりなくなつてしまった。

僕の仕事の内容は主にウチの会社を取り扱っている工業用などの薬品を他社に対して売り込んだりする事、まあ簡単に言うといわば営業のようなものだ。

本来僕は薬品に対して研究や開発といった部門で仕事をするはずだったのだが、会社の都合により営業といった形の仕事をすることになつてしまったのである。しかし、とくに僕は落胆するわけでもなく、これが社会というものなのかなくらいにしか思わなかった。実際、営業の側の仕事をしていても坂上さんにはセンスがあると褒められた。最近ではその営業の仕事も一人で実績をあげることができ会社での立場もそれなりにいい位置にいると思う。

今日の仕事は、某会社に注文された薬品の説明なんやらで取引先に顔を出していた。

予定では結構時間がかかるはずだったのだが、なぜか今日はスムーズにことが運び、僕にとってあまり必要のない暇な時間ができて

しまった。

会社に早く帰ってもとくにはないので、この必要のない暇な時間をつぶすことにした。こうやって仕事をサボることができるのも僕が営業を頑張っている特権だ。

取引先からの帰り道を歩いていると、途中に喫茶店があった。

外見はちよつと古い感じで、店の前にあった看板には『サボテン』と書かれてある。ちよつとユニークな名前のお店。僕はそのユニークさが気に入り、なんとなく入ってみた。

喫茶店の中はこじんまりとしていい雰囲気をかもし出していた。店の中はあまり広くはなく、カウンター席があり、それからテーブル席が3席ほどある程度だった。店の中にいる人は喫茶店のマスターとお客さんが一人、そのお客さんはカウンター席でコーヒーを飲んでいた。

僕は窓際のテーブル席に座るとマスターにコーヒーを注文した。よく見るとテーブルには小さなサボテンが置かれている。さらによく見ると他の2個のテーブル席にもサボテンが置かれていた。なるほど、この喫茶店のマスターは無類のサボテン好きが称してこの店の名前も『サボテン』になったのかもしれない。

しばらく窓の外の景色を見ているとマスターがコーヒーを持ってきた。

「コーヒーです、どうぞ」

よく見るとマスターは坂上さんと同じくらいの年代の人に見えた。おまけにふさふさとひげを生やし、なんともこの喫茶店の雰囲気とあっている感じがした。

「ありがとう」

そう言っ僕はコーヒーを受け取るとマスターはカウンターに戻

ってしまった。僕は味音痴の方だけれど、このコーヒーの味はというとおいしいと思えた。たいてい僕が飲むコーヒーはインスタントなので、こうやってコーヒー豆をしっかりとひいてくれたコーヒーはおいしいに決まっている。

コーヒーを味わいながら僕はカバンから本を取り出した。この本はいつも僕のカバンの中に入っている。大きさは文庫本と同じくらいの大きさ。時間がちよつとあるときはたいていこの本を読む。何回も読んだせいかちよつと見た目はボロいかもしれない。ちなみにタイトルは…

「タイムマシン」

タイトルの通り、あのタイムマシンについての小説である。現代の科学では実現不可能とされているタイムマシン。けれど、SF映画の世界や漫画の世界ではよく登場する。

実現は不可能なのにそれを描くというのは、きっと人間にとって誰の夢でもあるからに違いないと僕は思う。時間を自由に行き来できる便利な機械。この機械があれば学校で習った歴史なんかはどうかの誰かさんが考えた推測なんかではなく、すべてが事実のことを歴史としてそれを知る事ができるのに。地球にどうやって生命が誕生したのかも、さらに恐竜はなぜ絶滅してしまったのかだって。もしかしたら歴史を変えることだってできるかもしれない。もしくはそれだけでなく、やり直したい時間に戻ってやり直すこともできるかもしれない。

本を読みふけていると結構時間が立っていた。腕の時計を見る

と午後三時を回っている。そろそろ会社に戻らないとさすがに怒られる。

マスターにコーヒー代を支払い、また来るよと言って店を後にした。

店を出ると空はさつきよりもどんよりとした感じがする。いかにも雨が降ってきそうな空模様。そんな空を見上げていると余計鬱な気分になせられる。

会社への帰り道、すれ違う通行人はみな傘を持っていた。やつぱり雨が降るのかなと思い、早く会社へ戻ろうとさつきより多少早足になった。天気予報をすっかり見ておけばよかったとちよつと後悔歩いているとちよつと信号にひっかかり、青になるのを待っていた。待っている間に雨が降ってこないかと心配して空を見上げてみる。すると空からは雨ではなく雪が降ってきた。この冬初めての雪。

「雪か…」

僕はそいつって手のひらを上に向けた。すると空から降ってくる雪の一粒が僕の手のひらに落ちてきた。落ちてきた雪は結構な粒の大きさ。ひんやりと冷たい。その感覚を感じると僕の目から自然と涙がひとすじこぼれていた。そのことに対して僕は驚きはしなかった。

そして実感する。

また、この雪の降る冬の季節がやってきたのだと…。

第一章「冬の訪れ」(後書き)

ここまで読んでくださり、ありがとうございます。

これから少しずつですが連載していきたいと思っています。

また読んでもらえたら嬉しいかぎりです。

第二章「追憶」

あのとき僕は大学二年生だった。大学はというと。。大学の工学部である化学科に在学していた。なぜこの大学なのか？ということに対しては特にこれと言って理由はない。

いま考えても僕はあまり物事に関心がない高校生だったと思う。

高校三年生の時、僕の周りでは進路の話をすることが多くなっていた。当然それは自分の行きたい大学や受験などの話である。

僕の通っていた高校は進学校の一つであつたため、高校卒業後の進路は大学へ行くというのが一般的。実は僕が大学進学を決めた理由はただそれだけの理由なのである。ようするにみんな大学に行くというのが普通だから僕もなんとなく大学に行くという感じ。振り返ってみるとかなり適当だったなと思っている。でも当時の僕はそんな考えしか持てない人間だったのだ。

ちなみに大学に行くためには受験という関門をクリアしなければならぬ。大学受験はまさに受験戦争という名にふさわしいもの。

しかし、みんなが受験戦争に巻き込まれている中、僕にとつての受験とはまるで他人事のような感じでしかなかった。

その理由については僕の場合、学校の成績がまあいい方だったので、大学への受験方法は指定校推薦というものを使ったからである。指定校推薦とはある一定の成績があれば確実に大学に入ることができる受験制度のこと。

ただ、それだけに僕の進学した大学のレベルはあまり高くはない。よくある模試のランキングの中ではだいたい真ん中くらいの位置に

いる大学だと思う。僕の周りでは有名大学に入るというのを目指している人が多かったのだけれど、それに対して僕はあまり共感を得られなかった。レベルの高い大学に入って何がしたいんだろうと思っていたのかもしれない。

そうして僕は大学に入学した。さらにこの大学に入学すると同時に僕は一人暮らしを始めた。

大学に入学するというのは年齢でいうと十八ということになる。高校を卒業してもなお、大学を卒業するまで親になんでも面倒をみてもらうというのはどうかと思っていたからだ。なので親に無理を言って一人暮らしをさせてもらうこととしたわけ。きっとそのときの僕はそれが親孝行の一つであるとも思っていたのだと思う。

アパートは大学から歩いて十五分くらいの場所。アパートの見た目は築十五年を超えるであろうという古さ。しかし、部屋の中はというと意外と綺麗だった。きっと部屋のなかだけ改装でもしたのだろう。

大学生活が始まり、一人暮らししていて困ることがたくさん起きた。それはお金である。家賃は親が払ってくれると言ってくれたが、それ以外の食費や光熱費といった必要経費はもちろん自腹。その収入源を確保しなければ生きていけない。始めのうちは貯金をやりくりしていたがそれもだんだん少なくなってきていた。そのため僕は生きていくためになんとかしなければならぬと考えていた。

大学生のアルバイトとは普通、コンビニとか居酒屋とか家庭教師なんかが普通だと思う。けれど僕のアルバイトの場合はちょっと違

った。

化学科に在学しているため学生実験というのは必ずやらなければならぬ講義の一つ。そこで僕は担当の教授になぜかいたく気に入られてしまった。その教授いわく僕は実験をこなすセンスがいいらしい。自分ではあまり気づかないけれど。

ということで学生実験の担当教授が兼任している研究機関（これは大学内にある研究施設のこと）で僕は助手をやることになってしまったのである。助手といってもそれほど大げさなものではなく、担当教授のいない間に研究の補佐をするというもの。

実験とは理系の人間しか触れることがないので世間一般的には難しいものと考えられているが、実際は簡単なもの。薬品なんかは正確に測ったりして混ぜたりするだけ。実験のほとんどが待ち時間に費やされるのである。そのため、教授が忙しいときやなんかに代わりに時間のかかる実験などをするというのが僕の仕事になる。

給料に関してあまり期待はしていなかったのだが、貰った時にはさすがにびっくりさせられた。時給に換算すると三千円くらいかな。大学の教授というレベルを初めて知った瞬間であった。まあこんなことは他ではないと思うけど。これにより僕は一人暮らしでも生きていくことができるようになったわけ。

たいてい始めのうちはほぼ毎日に近いくらい研究施設に顔を出していた。そのときはそれ以外やることがなかったのである。

ただ、そのおかげで実験のテクニクは少しずつ磨かれていた。さらに教授が実験レポートの書き方など逐一指導してくるので嫌でも実験レポートを書く実力も備わっていった。

アルバイトも波に乗ってきた頃、僕は大学生活にもだいぶ慣れていた。友達も自然とできた。僕自身思うことだが、僕の性格はあまりよくないと思っている。物事にあまり関心を持たない方だからね。けれど、不思議と友達はできていき、僕は頼られることが多くなっていく。これは高校時代でも同じだった。世の中はなんとも不思議だ。

あるとき友達の一人、相田優二がサークルに入らないかと誘ってきた。相田優二という男は僕が大学で一番最初に話した相手だった。それ以来何かと大学では一緒に過ごすようになり友達という関係になったというわけ。

誘ってきたサークルはというと、典型的なテニスサークルというもの。僕は高校時代バスケットボール部に所属していたためテニスなんてやったことはない。優二にそう伝えたのだが、どうしても一緒にというのでとりあえず入ってみた。

その後、入ってみたはいいがやっぱりテニスというものは性に合わないらしいというのがわかった。辞めるということを優二に伝えたのだが、いるだけでいいから辞めないでくれと頼んできたので、いるだけにした。どうも優二いわく僕がいるのといないのとじゃ全然違うらしい。そのとき優二が言っていることはまったくもってよくわからなかったけど。

こうして一年があっという間に過ぎ、僕は大学二年生になっていた。

そして季節は冬。

十二月のある日、僕は食堂で昼食のカツカレー（この大学の学食ではベスト3に入るほどの人気らしい）を食べながら、アルバイトでお世話になっている教授の実験のデータやらを整理していた。すると相田優二が僕のところに来てきた。

「おう。昼飯食べながらにしてんの？」

と僕の向い側の席に座ると優二は話しかけてきた。

「教授の実験のデータを整理しているところだよ」

「うわ、いつも大変そうだな」

「そうだね」

優二とは一年間大学でつるんでいたのだからだいたいことはわかる。きつとこんな会話をしてくるときには、僕に何か頼みごとを持ってきたに違いない。そして案の定…

「あのさ、頼み事があるんだけど…」

ほらやつぱり。

わかりやすいやつ。

「今度サークルの忘年会があるんだけど、参加してくれない？」

僕は一年生のときにサークルを辞めようと思って以来、サークルの活動にはほとんど参加していない。ただ、優二に頼まれたときには特に予定がない限り、飲み会なんかのイベントには参加するようにしている。今回も僕には予定はないので参加することにした。

「ああ、わかったよ」

「おう、サンキュな。日程は今週の土曜の午後七時にいつもの居酒屋だから」

「了解」

そう言つと優二は颯爽と食堂を出て行った。

涙が通過した頬をぬぐい、僕は信号を渡り会社へ戻った。会社に戻ると残った軽い仕事を終え、いつもより早く会社を出ることにした。

すると僕の上司である田上さんという人が声をかけてきた。

「今日はもう帰り？ 天気もあんな感じだし今日は一杯やっていかないか？」

僕はいつも上司の誘いを断ることはないのだが、今の僕にはその誘いを受ける余裕がなかった。

「すみません、今日はちょっと用事がありました……」

そう言って上司の誘いを珍しく断ると、会社を逃げるようにして後にした。

外に出るとさっきよりもたくさんの雪が降り出していた。会社から持ち出した傘をさすと、僕は迷わず歩き出した。

行き先は公園。会社からだいたい二十分くらいのところで、駅からすれば5分くらいの場所にある。その公園はあまり広いものではなく、公園の中心に噴水が置かれ、その周りにはいくつかベンチがあるだけ。主に犬なんかの散歩に使われる程度の公園。

僕がこの公園に行くのは一年ぶり。それも去年ちょうど今日と同じような日に訪れたのだ。

公園に着くと、公園の前にある自動販売機で僕は温かいミルクティーを買った。

それから公園に入り、噴水を見つけると噴水の前に立ちそれを見上げる。こんな寒い日なのにこの噴水の水は流れ続けている。まあ流し続けないと、この寒さなので凍ってしまうからなのだろう。

まだ温かいミルクティーで寒くなった手を温めると、僕はミルクティーを飲んだ。

温かな甘い味が口の中に広がるのと同時に、ミルクティーは僕の体を優しくあたためた。

ここから見える景色はあの日からまったく変わっていない。

そう思いながら僕はそっと目を閉じた。

第二章「追憶」(後書き)

ちよつと長くなつた感じがありますが、一生懸命に書きました。
これからだんだんと物語が進んでいきます。
もしよければまた読んでもらえると光栄です。

第三章「出会い」

優二と約束した忘年会当日。僕は忘年会に間に合うギリギリの時間に家を出た。

今日の天気予報は「雪」らしい。確率はなんと六十パーセント。もし雪が降るとなると今年の冬初めての雪になる。天気予報をしっかりチェックしていたので忘年会には傘を持っていた。

忘年会の会場であるいつもの居酒屋に歩いて向かっていると、やっぱり雪が降ってきた。

天気予報は的中。

天気予報が当たったおかげで僕の傘はその存在意義を発揮した。天気予報士は今日の天気を当てることができ、きつと満足な仕事ができたと思う。ただ、いつも当てることはできるとは限らない。稀に外れることがあるのだが、外れたことに対して世間からたたかれるようだ。なんとも微妙な仕事をしてるんだなと勝手に考えながら僕は居酒屋へ歩き続けた。

僕には考え事をしながら歩く癖があるせいか、時間が本当にギリギリになってきた。

腕時計を見ると残り5分たらず。

やばい…。

今はちょうど公園の前。目指す居酒屋はこの公園の先である。いつもは公園を横切らないで行くのだが、今の状況ではそうはいかない。横切らないと5分以上かかってしまう。しかし、横切る場合は5分もかからない。経験とはこういうときのためにあるものだ。

遅刻すると優二はうるさい。おまけに遅刻するといつも罰ゲームをさせるのだ。あの罰ゲームは昔受けたことがあるが、たまったものじゃない。なので僕は最終手段として公園を横切ることを決めた。ちなみにこの公園はあまり広いものではなく、公園の中心に噴水が置かれ、その周りにはいくつかベンチがあるだけ。たいていいつも犬の散歩などに利用されるようだ。

だんだんと雪の降る量が増してく。

この状態だと明日は積もるかもしれない。

さすがにこの天気では公園には誰もいない。当たり前か、雪の中で散歩をする人なんていたら珍しい人間だ。

公園の中心の広場を横切ろうとすると噴水の前に人がいるのを見つけた。その女性は噴水を見上げているところだった。

傘もささずに雪の降る中に立っている。

その光景を見て僕は立ち止まった。

彼女は白いコートを着ていて、髪は黒くストレート、長さは肩甲骨くらい。雪の降る中に傘もささずに立っているわけだから頭の上にはちよつと雪が積もっていた。

しかし、その後姿はなんとも雪の降る景色に似合っていた。

一瞬ではあるが僕の時間が止まっているように思えた。

そのことに気がつくと僕は遅刻ギリギリなことを思い出し、その場を後にして居酒屋へ急いだ。それにしてもこの雪の中に傘もささずに立っているなんて不思議である。

居酒屋へ着いた時には息が切れていた。ちよつと走っただけなのに息が切れるなんて運動不足を物語っているに違いない。

店の前で呼吸を整えていると中から優二が顔を出した。

「遅刻ギリギリだな。まあ今回はセーフにしとくよ」

助かった…。

罰ゲームを回避することができたようだ。

「ああ、すまん」

僕はそう言つと居酒屋の中へ入った。

何時間経過しただろう。

居酒屋の中ではサークルのメンバー達のどんちゃん騒ぎが続く。毎回、開始からそのテンションがずっと衰えないことに驚かされる。

僕はいつもそのテンションの渦の中心から離れた場所にいる。

そのことに対して昔、優二にノリが悪いと言われたことがあった。もちろん僕も充分わかっていた。僕はなんともこの空気に馴染むことができないのである。

そのため飲み会ではひたすらお酒を飲み、となりに座っている人の話を聞いていたりする。それは聞き手に回っていた方が気が楽だと思つからだ。

しかし、そんなところが女性に対しては受けがいらしい。それも以前に優二に言われたことがあった。なんでも自分の話を聞িয়েくれる人がいるというのはとても助かるのだそうだ。女性の心はなんと不思議である。

腕時計を見るともうすでに十時を回っている。そろそろ開きになると思っていると、優二が僕の方に近づいてきた。

「これから二次会やるみたいだけど行くかい？」

う…。

またこれが続くのはさすがにうんざりである。そのため僕は軽く

嘘をついて断ることにした。

「すまん。今日はやることもある」

「そうか。じゃまたな」

優二はそう僕に告げるとまたテンションの渦の中心に舞い戻っていた。

店を出ると寒さが身にしみる。

水口酔い状態だったため一瞬にして酔いが覚めた気がした。

外の天気はまだちよつと雪が降り続いている。傘をさすと僕は帰宅することにした。

公園の前に差し掛かると僕は足を止めていた。先ほどの光景を思い出したである。

公園の中に一人で噴水を見上げていた女性。
雪の景色に似合っていたあの後姿。

まさかなと思いつつも公園の中に入っていく。

すると、あのときの彼女がまだ噴水の前に立っていた。

え…？

僕は慌てて腕時計を見る。午後十時過ぎ。忘年会の開始時間とほぼ同じくらいに公園を横切ったのだから、そのときは午後七時前のはず。そう考えると彼女は、この寒い雪の中に三時間ちよつとも立っていたことになる。

普段ならこんなこと僕はしないだろう。だって僕自身驚いているのだから。まだ酔いが覚めていなかったのかもしれない。

僕は彼女の近くに歩み寄り、彼女の頭の上に傘を差し出したのだ。

僕は傘を差し出すと彼女に話しかけていた。

「もしかしてずっとここにいたの？」

そう言って彼女の返答を待つ。しかし、彼女は僕を見ようともせず噴水を見続けている。

そして、沈黙…。

しばらく僕も黙って噴水を見上げていると、

「ええ、そうよ」

たった一行もない台詞を彼女は噴水を見続けたままさりと答えた。僕はここにずっと立っていた理由を聞いてみたかったが、それは初対面の人に対してあまりにも失礼だと思うのでやめておいた。ふと彼女の手を見てみると彼女は手袋をしていなかった。さすがにこの季節に手袋なしではきつい。

「ねえ、寒くないの？」

と今度は彼女にそう聞いてみた。

また沈黙…。

他人から見たら酔っ払いがナンパしていると思われるもおかしくない。変な話だが僕自身もそう見られても仕方がないと気づいている。

「ええ、寒いわね」

しばらくの沈黙の後、彼女はそう僕に言ったが、彼女の顔はやっぱり噴水を見続けたままだった。おまけに台詞は一言。

素っ気無い反応である。

しかし、この寒い中ずっと立たせておくわけにはいかない。それは誰もが思うことだろう。

「温かいコーヒーなんてどう？」

この場から離れるきっかけになればと思って聞いてみた。

すると彼女は多少考えたのか、しばらくの沈黙の後、僕の顔を見て今度は笑顔で答えた。

「じゃ、温かいミルクティーをお願い」

素っ気無い反応を期待していたので、笑顔で言われたときには正直びっくりした。

しかし、反応してくれたことに対して僕はホッとしていた。

僕が提案したコーヒーはあっさりと拒否されてしまったけど…。

彼女に僕が持っていた傘を渡すと、僕は公園の前にある自動販売機まで走って行った。走って行ったので途中雪に足を取られてこけてしまった。誰もいない公園でよかったと、このときほど思ったことはなかったね。

自動販売機にはちょうどコーヒーとミルクティーがあった。自動販売機に硬貨を入れるとガタンという音と共に飲み物が出てくる。二つの缶を両手に持つと、僕は彼女の元へまた走って戻った。両手に持った二つの缶はとても温かい。心地よいぬくもりを感じた。

彼女のいる場所へ戻ると雪はちょうどやんでいた。

「はい、どうぞ」

そう言っ僕は彼女にミルクティーを渡すと、噴水のふちに積もった雪を払い、腰掛けて座った。すると彼女も僕の隣に腰掛けた。そして彼女がミルクティーを飲むのを確認してから僕も缶コーヒーを飲んだ。冷えた体がコーヒーによって温められる。

「ああ、おいしい」

彼女はミルクティーを飲むとそうつぶやく。

彼女の吐く息が白く舞い上がる。

横から見ても彼女の姿はやっぱり雪景色と似合っていた。

噴水からの水の流れる音が夜の静寂と合わさってとてもきれいだと感じた。その音を感じていると今度は彼女から僕に話しかけてきた。

「私の名前はね、綾瀬空って言うの。あなたの名前は？」

きれいな名前だと思った。

「…ああ、久瀬拓海って言うんだ」

「たくみ？　もしかして海って漢字使ってたりするのかな？」

「そうだけど…」

「偶然ね。私は空って漢字使うもの。空と海かあ、なんか名前に接点があるのって親近感わくね」

そう言うとき彼女は僕に微笑んだ。その笑顔はさきほど素っ気無い反応をしていた彼女のものとは思えない笑顔だと思った。

「ありがとう、あなた優しいのね」

そう言うとき彼女はまたミルクティーを一口飲んだ。

このとき僕は彼女のこの『ありがとう』という言葉はコーヒーのお礼だと思っていた。

「どういたしまして」

僕はそう言うとき彼女に微笑んだ。

これが彼女との初めての出会いだった。

第三章「出会い」(後書き)

なかなかスムーズに更新するのは難しいですね。けど、頑張っ
て少しずつ更新を増やしていく予定です。

もしよければ感想など、もらえるととてもうれしいです。
これからのことに役に立ててばと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6315d/>

タイムマシン

2011年1月27日13時27分発行